

# 横浜歌人会 会報 112号



- 01 総会・新春歌会報告／詠草
- 05 横浜行きつけの店
- 08 評論・横浜の歌人たち
- 09 会員作品三首
- 10 編集後記

小笠原信之、時本和子、小島熱子  
田村元、結城千賀子、内山汀子他  
間ルリ  
野々山三枝、田之口久司他

## 新春歌会報告／詠草

平成27年1月25日 馬車道十番館にて開催  
詠草参加49名



歌会風景 司会・千々和久幸氏

## 新春歌会報告

小笠原 信之

水沢腹堅（さわみずこおりつめる）そんな大寒の一月二十五日であったが、穏やかな日射しの中十番館で新春歌会が開催された。出詠歌五十首、うち六名の欠席があり、四十三首の歌の勉強会と

なった。千々和前代表の司会のもと、席順に従い、一首づつ感想を述べてゆく。十首終わったところで、指名された人がまとめ感想を述べるという方法であったが、途中様々な意見が交わされ、普段の我が結社の歌会では見られない論評を聞くことが出来た。

木枯しのとだえし空に煌々と星座図のごと北  
斗星貼り付く

嘗て唱歌として習った「冬の星座」を思わせる  
ような美しい歌があり、一方では

夕映えの谷戸の古屋の柿簾ふるやそつとうごかし秋  
の風ふく

のような古歌を巧みに取り入れた歌も見られた。この歌に関しては、柿簾を動かすには秋の風は軽すぎるのでは、という意見もあった。

裸木になれる桜のむかふには冬の陽貯めたる  
照柿いくつ

冬の陽のぬくもりを感じさせる歌として評価された歌だが「むかふ」か「むかう」かの問題が提議された。例外ながら作者の意図するところを聞くことにより、全員共通の読みを得ることが出来た。

レモネードの実は手のひらに輝きて冬を一身  
にあつめる如し

レモネードはノンアルコールの飲み物でその実とは如何なるものぞというのが大半の意見であったが、ピンクレモネードという小粒のブルーベリーの一種との事。大半の人が知らない題材を歌にすることは是非が問われた歌であった。「歌にとつて何が幸せかを探つてゆく事が、作者にとつても読み手にとつても最重要な事ではないか」という吉野裕之氏の締め言葉が印象的であった。



総会 議長・吉野裕之氏

### 新春歌会に寄せて

時本 和子

一月二十五日、馬車道十番館へ。私にとつては二度

目の新春歌会となる。木の床にほの暗い照明、この会場に歌の会ほど似合う集まりはないのではないかと開会を待ちながらすこしだけ周りの見えるようになった今年と思う。

歌会に先立つ総会は吉野裕之氏の司会により効率よく進められ、次世代への承継ということが話題になると、出席者から素早い反応があり、新入会員を受け入れる場合の資格に言及する意見も出された。

新会員を求めることは会の存続継承発展に重要なのはどこも同じと思われるが、新しい世代に呼びかける場合、「選ぶ」「選ばれる」ということがあるとすればそれは双方にあるということであろう。

歌会への出詠は五十首（欠席六名）。超結社の会であれば評者に一種の気遣いのようなもの見受けられることはあつても、会が進むに従つて往々にはみ出してくる。それが面白い。歌もふだん自分の結社ではあまり見られないタイプの歌にも会える。

それにしても今回、出席者のお名前とお顔の一致して分かった方はようやく二十人程。短歌の鑑賞はやはり作者が分かった方が楽しい。そんなことを思いながら、新春歌会の詠草と作者一覧を照らし、また前年の新春歌会、観月歌会、吟行の詠草なども並べて見ていると、心惹かれた歌、気になった歌の作者名に一度ならず出会うことがあつて、そんな時は勝手に親しみを覚えたりする。こんな遊びも次回への関心につながればよいと思う。



平野代表委員挨拶

### 新春歌会報告

小島 熱子

平成二十七年横浜歌人会の総会、新春歌会は一月二十五日（日）午後一時より馬車道十番館で行われた。一月にしては珍しい暖かい穏やかな日であった。

総会は恙なく終わり、午後二時より新春歌会が始まった。司会は千々和久幸氏。

出詠数は五十首だったが当日欠席者が六名いて四十四首となった。テーブルの座席順に各自一首ずつ評し、その後十首ずつ第二評者として中川佐和子、小島熱子、角宮悦子、朝井恭子、高尾文子の五氏が評した。

会員各自は概ね作品に寄り添った温かい読みをしたが、ある歌の「レモネードの実」という語彙が分からなくて、歌意が読みとれず、その解釈をめぐつ

てしばらく会場に意見がとびかった。一般的でない特殊な素材を詠む時の難しさを考えさせる問題提起ともなった。

全体として魅力的な詠草が多かったが、作者の思い込みが強く、読者に伝わりにくい作品等もこの歌会で批評してもらったことで自作への客観視が出来たのではないかと思われる。また、さすが横浜歌人会の新春歌会を思わせる横浜の地名や老舗飲食店の名を入れた作品もあり、横浜への思いが伝わってきた。

今回も新春歌会は第二評者を立てたことで歌の理解、鑑賞が各自にとってより深まり、一首一首が立ち上がって来たこと、また歌会の詠草が、会員に前以て届いており、初見でなかったということが歌会の内容をより濃いものとしたと感じた。(これは横浜歌人会の歌会のやり方として定着しているようだが、よいことだと思っ。)

千々和久幸氏の的確な司会のもと、時間配分もスムーズにゆき、濃密な新春歌会は4時半に終了した。

### 平成二十七年 度 新春歌会 詠草

・夕焼けを小脇に抱へ帰りきて豆腐に和へて酒の

あてとす

後藤恵市

・暮れやすき一日を惜しみ幼らは夕映えの中ブラ  
ンコを漕ぐ  
朝井恭子

・木枯しのとだえし空に煌々と星座図のごと北斗  
貼り付く  
塚田キヌエ

・二人居の家居にも春来にけらし庭より届く初孫  
の声  
綿貫昭三

・社をとる風に御神酒の二本口もとつばむ白き  
しずけさ  
高橋みずほ

・横浜に生をうけしにあらざれば勝烈庵に初の足  
跡  
塩野崎宏

・背に射す斜陽は吾を押すごとし夕焼け小焼け旨  
酒が待つ  
小笠原信之

・夕映えの谷戸の古屋の柿簾そつとうごかし秋の  
風ふく  
平尾眞

・冬晴れのひかり乱射する湘南の海に咬むごとく  
白波はしる  
小島熱子

・裸木になれる桜のむかふには冬の陽貯めたる照  
柿いくつ  
杉下幹雄

・遥かなるシルクロードの空の色静かに湛ふる  
白瑠璃瓶  
藤田絹子

・燃ゆるまま散れる紅葉を目に追へば風に揉まれ  
て消えゆきにけり  
小林勝

・澄みわたる枯野に一人立ち出でん何のせましよ  
か 掌の平のくぼみ  
伊藤美枝

・現世に啄木、多喜二のもしあらば現下の世情を  
何と思ふや  
田之口久司

・蔓引きて君が手にとるサネカズラそのたぐひな  
き緋実よろこぶ  
川井怜子

・ゼムクリップ拾ひ上げつつさびしかり三日ほど  
見つ放せしもの  
河北笑子

・アルテリーベ詠みし歌あり弾くピアノ聞きつつ  
妹と食事をしたり  
石田幸子

・ビルの窓の残りの灯りのひとつ消え俄に闇は平  
面となる  
佐久間裕子

・大階段跳ねあがりゆく脚まぶし鎌倉八幡宮梅日  
和  
井澤幸恵

・なかぞらにひととき耀く雲の縁ウオーキングの  
歩の緩むなり  
堀部知子

・YOKOHAMAとベイブリッジのレリーフを  
車はげしくタイヤ磨りゆく  
伊藤宏見

・無慙にも傘の骨折れぬ旋毛風吹くここぞ武相の  
国さかいなる 渡辺礼比子

・雲ひとつ流れゆきたり この丘にわれと雲より  
あらぬ午後なり 平野久美子

・いちやう散る神宮外苑道すがら人の年輪の少な  
さ思ふ 竹内芳恵

・しんしんと冷ゆる大気に染み透り新春の光庭に  
満ちをり 中村規子

・パソコンのこはれて息子を呼びもどす五年に一  
度こんな楽しみ 池谷しげみ

・体脂肪の増え正月の終りたる酒のせいとはゆめ  
言わぬこと 千々和久幸

・澄みとほる剪定の音きこえきて春の光の降る中  
にゐる 葉山昌子

・银杏降る海岸通りを歩みゆき梢の先の鈴の音聴  
きぬ 長野道子

・横浜の港にそいて高々とイチヨウ黄葉秋を称え  
る 野崎美智子

・クラシックに執せし妻への盛花は白きシンフォ  
ニー奏つることし 松本嘉猷

・「空気です」と天野教授は加寿美さんを無けれ  
ば死んでしまふとにつこりと笑む 清水八千代

・すがすがと一身めぐる若水は道志川の水 汚染  
なきみず 高橋庚子

・智恵子となり古着にはさみをいれてゆくこの快  
感を人には言えぬ 新田由美子

・戦争はしないと決めた日本にまだ帰らない兵士  
の遺骨 角宮悦子

・うた一つ「詠み人知らず」と残されしゆかしさ  
或いはその人は風 結城千賀子

・にくき彼奴は悪性リンパ腫日本の男高倉健を殺  
めた 原昌子

・水苔の生えて水源がそこにありいつの世からか  
湧きてやまざる 山本登志枝

・レモネードの実はてのひらに輝きて冬を一身に  
あつめる如し 荻谷君代

・娘にも母の口癖まねてみる「わたしの歳になれ  
ばわかるわ」 渋谷香代子

・ひとつ手に入ればふたつ欲るころ 크리스  
マスローズの多弁花に寄る 時本和子

・言の葉を貼りて剥がしてまた貼りてまた固まら  
ぬ 未完の一首 桜井健司

・柿食へば種選りわけてゆく舌よ この正月に長  
の子帰らず 尾崎知子

・こまやかな秋の実かぜに吹かれゆきブロック塀  
の根元にたまる 嵯峨直樹

・寄り道をして遅くなり残照にもみぢ明るむ谷戸  
へ帰来 土屋美代子

・ゆきゆけば落花に遇へりこの道は若者ら戦場へ  
いざなひし道 高尾文字

・たくさんの人が幸せこのまちはふんころがしと  
いう虫がいて 吉野裕之

・モンゴルの野生の羊の大きくて巻いている角  
あなたはあるか 中川佐和子

・彼の言葉木霊となりて鎮もらむ霧深き森に窓を  
開きぬ 津波古勝子

・爆音がとどろく空のはるか先冬日に光る旅客機  
仰ぐ 真鍋正男



## 横浜◎行きつけの店

### 横浜の行きつけの店

田村元

二〇一三年までの六年間、横浜で仕事をしていた。仕事が終わると、夕食を兼ねて酒場で一杯ひっかけ、帰るのが私の日課で、職場に近い野毛や関内が主な行動範囲だった。

夕さればわれを誘ふ路地ありて叶家、萬里、ときをりB A S I L

第一歌集の『北二十二条西七丁目』に収めた二〇〇九年の歌である。下の句に詠んでいるのは、三軒ともよく行った野毛の店だ。「叶家」は落ち着いた居酒屋で、某有名女優の実家との噂がある。「萬里」は〈日本で初めて〉を謳う餃子が名物の中華料理屋で、「B A S I L」はワインが飲めるお洒落なイタリアンの立ち飲み屋だ。

大根の皮の浅漬けかりこりと「まだ火曜日」を噛みしめてをり

二〇一三年に発表したこの歌の場面は、関内の「立半」という立ち飲み屋である。普通は捨ててしまいう大根の皮を浅漬けにしたつまみがあり、たしか百円か百五十円だったと思う。価格の安さも魅力的だが、

何と言っても歯応えがたまらず、メニューにあると必ず注文したものだ。

一人で飲む時はだいたい立ち飲み屋で、「大黒」、「つとん」、「no-chari」などによく行った。ビールかホッピーを三、四杯と、つまみを二、三品。それで二千円以内で収まるのが相場で、とにかく毎日飲みたい私にとっては、ありがたい価格帯だった。

当時の職場での担当業務は、某省庁との調整である。社内との板挟みになってストレスが溜まることも多く、仕事を終えて立ち飲み屋のカウンターに立つことが、ささやかな息抜きになっていた。

今では、なかなか野毛や関内には飲みに行けなくなってしまったが、ときどき家で大根の皮の浅漬けを作ることもある。大根の皮を一センチ×三センチ程度の短冊状に切り、市販の浅漬けの素に漬けるだけ。いたって簡単だ。ホッピーを片手に、かりこりと大根の浅漬けを噛んでいると、横浜で飲んでいただけの日々が懐かしく蘇ってくる。

### 横浜の行きつけの店 喫茶室「芸亭」

結城千賀子

東京から横浜に移り住んで気づけば四十年目の春——、とはいえ特別に行きつけの店やこれといった最良の店もない。

強いて挙げるなら、横浜山手の港の見える丘に建つ神奈川近代文学館の、そのエントランス奥にある

喫茶室であろうか。別館の閲覧室に資料探しに通う折に、あるいは文学館の企画展を見た後に、一息入れる所である。

まず明るい大窓からの港の展望がよい。すぐ眼下に煉瓦の霧笛橋とガス灯、木立を隔てて青い湾と白いベイブリッジが望める。店内は静かで、展示を見終えた紳士や婦人が、珈琲を前にひとり本を読んでいたたり外を眺めていたりする姿は、なかなか絵になる。町中の普通の喫茶店では、こうした落ち着いた雰囲気にはならないだろう。

何年か前までは、ここには確か「横浜珈琲館」が入っていて、ちよつと小うるさい(?) こだわりのマスターが珈琲を淹れていた。季節により、入荷するその折々の珈琲豆に思い入れがあったようだ。

今は店名も変わり、こう言っては何だが、主婦の片手間のような飲物と軽食を出す。サンドイッチの切り方に呆れたのは、開店当初の頃だったか。店を切り盛りするのは物腰の上品な女性で、店内は変わらず静かであり、場所柄と雰囲気ゆえか珈琲の味も悪くないのを可しとしてゐるが。

この喫茶室、名を「芸亭」と言う。芸亭とは、奈良時代末に石上宅嗣いそのみやかつつが開いた日本最初の図書館のこと。「芸」は別字で一種の香草を言い、虫除けのために書冊に挟んだので転じて本そのものを指す。

文学館に近く、霧笛橋の袂に樹齢七十余年の染井吉野の老木があり、臥竜の如く横に幹を伸ばしたそ

の風姿を賞でて、初代館長の小説家・中野孝次がこれを「芸亭の桜」と名づけた。春には橋の上から爛漫の花の贅を堪能できる。文学館自体を芸亭に見立て、そのシンボルツリーの桜というわけである。だから、館内の喫茶室も「芸亭」。神奈川近代文学館をお訪ねの節は、是非お立ち寄りを。

### 〈横浜行きつけの店 雑感〉

内山汀子

〈行きつけの店〉というとき、私には描いている夢があった。街角にある小さなカフェ。クラシックの曲が低く流れる薄暗い電灯の下には、古びたアンチックの椅子が置かれ、その片隅で濃いコーヒーを啜りながらシュトルムの詩集を読む。マスターと二言三言ことばを交わす以外は、この隠れ家のようなカフェに遁れてひとりの世界に浸る。私にこんなお店があったらいいなあ。と思うのは、やはり夢でしかないのだろう。現実の話に入ろう。

沈黙考してまず浮かぶのは、横浜高島屋デパートである。此処は確かに毎週のように行っているから〈行きつけ〉と言ってもいいかも知れない。百貨店というからには何でも揃う。めあての一つは、地下2Fの食料品売場である。中島水産のお魚。新鮮という信頼をその日の好みで選ぶ。三陸一等わかめは口当たりも滑らかでお味も良い。次は今半の牛肉。ピンからキリまでのお値段だが、当日の献立やお財

布の中身で決める。ほかにも目がつけば手が伸びる。

目的もなくフラフラするのもまたいい。たいてい

5Fの婦人服か、7Fの家庭用品売り場をフラつく。

5Fでは、プレタの店を横目で眺めながら専ら目の保養である。冬と夏のバーゲン掘り出し物の狙い目。一目惚れ、衝動買いに嵌まりやすい私は失敗も

少なくない。いい年をして困ったものだが、幸いなことに最近は何も欲しくない物が無くなってきた。いや、こ

の方が困ったことかも・・・。7Fは見るだけで楽しい。主婦の私は、高級なお皿やカップ、お鍋類、

焼き物や漆器などに目がゆく。

買い物の間には5Fのメンバーズ・サロンで一息入れる。混雑する午後の時間以外は、ゆつくりと

本も読めるし、お茶も頂ける。設備の良い化粧室があるのもありがたい。

東口の横浜スカイビルはランチに便利。高層階は人影もまばらでゆつくり食事ができる。28Fのイ

タリアンANTONIO、Sへはよくゆく。店内の雰囲気もお味もほどよく大きな窓より望む景色も素晴らしい。27Fのバイキング店クルーズクルーズ

は品数も多くシニア料金があるのも嬉しい。

最後になったが、最近、久しぶりに行って大いに満足したのは崎陽軒本店の嘉宮である。店内のイン

テリアもお料理も一流で、流石という外ない。仮にも〈行きつけ〉と言って吹聴してみたい店であった。

### 有隣堂とオデロン座

小野政男

横浜で、私の行きつけの店といえは何と言っても

伊勢佐木町に在る有隣堂であろう。昭和十六年に小学校高等科を卒業して以来からなので、古い古い。

日本の古典文学に興味を抱き、或いは絵画に関する本を探して、週に一回は鶴見の潮田本町通りからバスに乗り、生麦で市電に乗り換えて通った。小一時

間はかかったろう。市電にゆられて行くのが何とも好きであった。

在る時、美術関係の並ぶ本の前にしばらく立っていたら、品のない老紳士から「君は絵が好きなのか」と問われた。私は「はい」と答えた。何しろ私は将来画家になりたいと言って親や兄たちに反対され、

前年十五の歳に家出した事さえあった身。まだ、諦めきれていなかった時だ。老紳士はしばし何か考えていたようであったが、やがて立ち去って行った。

次は、伊勢佐木通りの中ほど十字路の一角に建つオデロン座に頻繁に通った。オデロン座は洋画専門

の映画館で、昭和ひと桁の頃からアメリカのターザン映画がここで上映されていたのである。勿論、私も大ファンで、ターザンが鰐わだかまと格闘する場面に、手に汗を握って観ていたひとり。

もう一つ。日本がアメリカから初空襲を受けた昭和十七年四月十八日は、私は伊勢佐木本通りの日活

館で映画「第五列の恐怖」(轟夕起子主演)を見てい

た。「第五列」とはスパイの異称だったのである。見終った午後一時頃伊勢佐木本通りへ出たら、あちこちに警防団が立ち物々しい雰囲気だった。映画館側は大混乱を避けて映画を続けていたわけだ。そのあとは、潮田本町の実家まで歩いて帰った。時々空襲警報が響り、路傍に設けられた防空壕に駆け込んだりしながらー。

## 横浜エッセイ

井澤幸恵

昔は、鎌倉郡だった横浜のはずれに住んで六十五年近い。引き揚げ者だからというわけでもないが空襲も焼け野原も占領下の市街地の記憶もほとんどない。軍人の住宅やかまぼこ兵舎、馬車道を駐留軍のバスが走り伊勢佐木町を外国人家族がかつ歩していた景の記憶がないのは今となっては至極残念だ。

司馬遼太郎の『街道をゆく』の二十一巻は神戸・

横浜散歩芸備の道。以前NHKの深夜放送で松平定和アナウンサーが朗読していた。夜更けのぼんやりした頭にもわかりやすい文章とその語りにかく感激して聞きほれた。

吉田橋のほとりという小題は関内付近に触れていて簡便に横浜の市街地の歴史がわかる。

横浜歌人会に入会して以来関内の十番館で開かれる新年歌会に参加している。瀟洒な建物は関内の歴史にマッチしたレンガ造りで山手にも別館がある。

勝烈庵のほうが先にでき後に独立したようだ。レトロな店内は時代に影響されることなく装飾も落ち着いて雰囲気はひかえめ。ハイカラという言葉は、たけの高い襟、西洋風を気取る、流行を追うという意だが、私の感覚では先端をいくのではなくいくぶん引いたセンスの良さを表わす語として意識して使うことが多い。洋食の味は一步引いた大人の味とでもいおうか、ていねいに料理され余裕があつて背伸びをしてまで頑張らないという横浜人気質とぴつたりという失礼になるだろうか。チョコレート、レモン、ピーナツクリームをはさんだビスカウトが好きた。さくりとしたビスケットも飽きない。横浜を代表するハイカラなお菓子として推奨したい。今年はおウエイターが気になった。目配り、気配りがいきとどき料理の扱いが丁重。お年をうかがうと七十五歳より上との答え。料理をランクアップさせるのもウエイターの力量だろう。

街は有機的な存在だと思う。時代によって浮き沈みがあるのはあたりまえで新旧が自然に入り混じり、歳月の濃淡が路地裏から、行き来する人たちから感じられるようになると魅惑がます。

## 立呑屋 とんちゃん

後藤恵市

行きつけと言うほどでもないが、時々一人で立ち寄るのが立呑屋「とんちゃん」で、立ち寄るのはた

いてい昼間(午後1時開店)。この店は鶴見の駅前ロータリーの京急線寄りにある。ちなみに、JR線寄りには姉妹店「鶴見ホルモン劇場」がある。「とんちゃん」は間口が狭く、2メートル程しかないが、奥行きは10メートル以上ある、所謂鰻の寝床で、カウンターの立ち席の他、かなり小さなテーブルの椅子席もある。まあ、椅子とは言っても腰掛部分は自転車のサドルに毛が生えた程度。座りつづけるのはかなり苦痛で、立って呑む方がむしろ楽なくらいである。

「とんちゃん」は一般の居酒屋同様、冷や奴とか刺身などもあるが(私は食したことがない)、何と言つても目玉は焼きトンと白モツの煮込み。私が注文するのは何時もワンパターンで、ナンコツ二本にカツ二本とシロ二本と決めている。その日によっては豚バラ二本とか煮込みを追加することもある。また酒はいつも芋焼酎(黒霧島)のお湯割りだ。

昼間から結構混んでいて、若い女性グループ、いつも一人で飲んでいるおじさん(私もそのひとり)、サラリーマン風の男性グループ、爺さん・婆さんグループなどバラエティーに富んでいる。

焼きトンはチェーン店のようになちやちなものではなく、大きく分厚く切っており、何度もかみしめながら食べる。口いっぱい焼きたんと炭火の香りから、ねっとりした脂が粘りつく。これを「黒霧のお湯割り」で胃袋に流し込むのだが、芋焼酎特有

の香りが加わって何とも言えない至福感に包まれる。  
ここで下手な歌を二首。

・みぞれ降る午後の一時にヤキトンを頬張りながら  
焼酎立ち呑む

・シロモツにガツとナンコツ食みればこの世のこ  
とは唾液となりぬ

・道の端にカギひとつ落ちてありしかば男ひろふも  
戻して去りぬ

こうやって昼酒に酔いながら、煙草をふかして世  
間を見回すと、原発も秘密保護法もみんなどうでも  
いいように思えてくる。それが楽しい。



### 横浜の歌人たち

間ルリ

アンソロジー横浜2009に至るまでに横浜歌  
人会は6冊の合同歌集を出版し、会の記録を辿るこ  
とができる。横浜で生まれた歌人も横浜に住むよう  
になった歌人も「横浜歌人会」という共通項で結ば  
れている。

横浜の歌人たち 物故者編 一九七五年

A 横浜の歌人たち・II 一九七九年

合同歌集 よこはま 一九八九年

横浜歌枕集成 一九九四年

B 横浜歌枕集成・新版 二〇〇〇年

C 横浜の歌人たち III 二〇〇五年

D アンソロジー横浜2009 二〇〇九年

横浜歌人会は終戦後四年（一九四九年）の「横浜  
歌話会」に始まる。その後一九六四年頃より横浜の  
人口が急増し始め歌人の移住も増加した。宮柁二が  
東京に移ったが、岡野弘彦、島田修二、吉田松四郎、  
山本友一らが転じて来て「横浜歌人会」としての発  
展の機運につながった。この中で「横浜歌話会」以  
来中心だった尾山篤二郎、飯岡幸吉らが二十年の間  
に相次いで他界する。一九六九年、「横浜歌人会」の  
結成には約八〇名の歌人が参加した。一九七九年の  
A「横浜の歌人たち・II」は発会より十周年の記念  
の歌集である。磯幾造・角宮悦子等の歌が記載され  
ている。横浜は終戦により廃墟と化したけれども復  
興力も強かった。

A 高速道の下の小暗きところ来て町工場あり昼  
を点せる 磯 幾造

A 体重を汝に預けてゐるときも秋の礎石はあは  
かれてゐる 角宮悦子

論客の磯幾造に叙景のすぐれた小品があり、角宮  
悦子は瑞々しい感性でときめきを詠んでいる。

次は合同歌集B、C、Dに著しい開発を遂げた横  
浜港を詠んだ歌を見てみよう。新旧のバランスを保  
つ街に加わり、一九八九年のみなどみらいにより歌

の点景も大きく変わる。

Bの「二〇〇〇年の歌枕集成大成」にある歌から。

B なせばなるならむならむと鼓笛隊 山下公園  
向けて進み来 山形裕子

B ああいくさなき半世紀波止場には散弾のごと  
鷗はじけて 高尾文子

B 自転車に額かがやかせ帆船のごとく風截る夏  
の少年 丸山美寿子

何れの歌にも発展途上の力強さと混迷が絢交ぜ  
になり横浜の上昇気流が見えてくる。

B いちにんのながき詩業を讀ふると人満ちみつ  
る船のホールに 青田伸夫

B かなしきはザ・ヨコのひびき横浜の子らほもい  
まもかく呼びあひて 中村節子

青田さんの歌は横浜の歌人たちの永遠の魂を詠  
み継いでいる。中村さんの歌は横浜の接収時の風習  
を描いている。二〇〇五年と二〇〇九年の合同歌集  
からは次のような歌が見いだせた。

C 連れ立ちて大棧橋のJACK CAFE歳月  
はひとをまあるくさせる 中川佐和子

C 「干満」と「出船入船情報」のコラム目に入る  
やはらかき朝 森 藍火



C 「よ」るべなき 夜這い 与太郎横恋慕 与力酔い  
醒め寄り道夜鷹 千々和久幸

D ゴンドラに窓拭く男 初夏の空ゆく雲も磨きお  
りたり 朝井恭子

D 観覧車 インターコンチ 日本丸 帰路を灯  
れり一構図なし 佐波洋子

D 白銀に朝は耀ひ 黄金色に夕は煌らか ベイブリ  
ッジは 永平 緑

D 赤レンガ倉庫の上の 避雷針風の流れるとがる  
位置 高橋みずほ

D 映画館がスーパールになり パチンコ屋になりた  
る頃より寂れはじめぬ 平野久美子

横浜歌人会の変遷とともに横浜の港の建造物も  
増えた。港の風景に自由と未来の風を感じる歌がみ  
られる。ここでは横浜港に関する歌しか選べなかつ  
たが、横浜の歌人たちの矜持を保つ 合同歌集発行が  
長く続いていることは頼もしい。

約五十年を振り返ってみて 歌人会メンバーの持つ  
力量と余裕を感じる。横浜の復興と発展の力に押さ  
れない自我と各歌人の持つ自信がわかる。今回は多  
く抄出できなかったが、心に深く感銘する歌に五十  
年の歳月を歌った歌人たちのおの個性を見た。

## 会員作品三首

野々山 三枝

- ・さいはての流水の旅へ心ふくらみて 食む氷頭なますこりこりと旨し
- ・さ庭へのまつ赤な珠実 藪柑子さやりて 朝戸出 転ばぬやうに
- ・庭かげに春爛漫の花やはらげく 塩漬けす母の手わざ恋しも

田之口 久司

- ・「原発も辺野古の基地もいりません」詩を読む 吉永小百合 凜として
- ・戦時下も特高も知らぬ 総理らが 秘密保護法へ走る 危うさ
- ・柿の実の赤きを詠みて 捕らわるも なお反戦歌詠みし 順三

佐波 洋子

- ・玉牡丹・紅千鳥などうるわしき名のありて 見驚と見ればおどろく
- ・一重なる加賀や野梅のゆかしさに 詰まりは至るこよなきものと
- ・あけぼの杉のふもとに 座せばまださむき羽状の葉が明日を待てり

清水 正子

- ・ビル風の吹く新しき街となり 花屋の行方だれも知らない
- ・人質の生死わけしは何ならむ 風いでて 夕べ身を切る寒さ
- ・夜のラジオ聴きつつ おもふ 烏賊墨で モーツアルトの描きしは何

西 登美子

- ・祝ひ餅背に立たんとす 曾孫はよろけながらも 又立ち上がる
- ・若きらと共にし 励む 自 彊 術 二元気に 生きる 貴重な時間
- ・港よりの銅鑼の音聞かぬ 年送り物足りなさも 年ごと薄る

中川 宏子

- ・見上ぐれば夫の顔ある平穩を夜道のひとつの灯りと思ふ
- ・こんこんと咳が白雪呼ぶときにふる里の風鼻さきを過ぐ
- ・冬の夜は死者に逢ひたしわが丘に白き破片の降り積もりきて

渡辺 礼比子

- ・さりげなく枕草子の一節を諳んじにけり探鳥ガイド
- ・枕花調の注ぎを待ちいたりハワイアンソング流るる花舗に
- ・早春の羽田空港を草まくら旅立つ汝の肩か細かり

鶴見 典子

- ・豆撒きが八年ぶりに催さる弘明寺観音春の声して
- ・節分に恵方巻買ふ人の列、バレンタインにチョコ買ふ列も
- ・寂しきと死ぬのは兎 人もまた孤独死選ぶ震災二十年

田代 弥生

- ・一枚の片道切符いつも持ち今を歩める水仙ロード
- ・ちちははの暮しのなかに育ちあてて季よければ赤き椿とわたし
- ・小春日の河津桜の花の道ひと日遊びて陽はかたぶきぬ

高橋 みずほ

- ・水澄ましかきつつ水にしずみゆく流れのはやき水路かな
- ・豚のいる村があつてハムになるめぐりしずかに夕焼けてゆく
- ・傾きながらかたむきながらまわる遊具にゆだねている人間

編集後記

・本年の総会・新春歌会は平成27年1月25日に馬車道十番館にて開催されました。  
詠草参加は49名でした。

・会報の構成にご意見・ご希望がございましたら、是非とも左記平野あてご連絡ください。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記後藤あてお送りください。会報に掲載させていただきます。

・振替口座(郵便局)は左記の通りです。

00230-0-52137 名義 横浜歌人会

・横浜歌人会では現在、年に一度、会員名簿を更新し皆様に配付しておりますが、名簿への住所・電話番号の記載を希望しない方がおられましたら、ご面倒でも左記平野あてご連絡くださいますようお願い致します。

なお、会員名簿は会員の住所・氏名・電話番号の記載された個人情報集合物です。各自の責任において管理・保管してください。

発行日 平成二十七年四月二十日

発行人 横浜歌人会 代表 平野久美子

〒245-0066 戸塚区俣野町  
1403-11-206

編集人 後藤恵市

〒236-0046 金沢区釜利谷西 1-46-6

Tel・fax 782-8778

e-mail kg4238@n.jcomnet.jp